現代日本語の「テイル」形アスペクトの意味解釈

鎌　田　精三郎

1. はじめに

本稿では，Smith（1992）の理論的な枠組みに従って，現代日本語の「テイル」形アスペクトの意味解釈を試みる。Comrie（1976：3）によれば，アスペクトとは，「ある1つの出来事の時間的内部構成の様々な見方」—Aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation—である。この定義から分かるように，アスペクトとテンスとは密接な関係があるように見えるが，この2つは全く異なる文法範疇である。どちらも時間に関わるという点では類似性があるが，時間との関わり方が異なるのである。テンスはある1つの出来事の生起する時間と発話時との時間的関係を示すものである。例えば，（1a）では「走る」という行為が発話時に行なわれていることを表わし，（1b）では発話時の前にその行為が生起したことを表わす。

(1)　a．太郎は今公園で走っテイル

　　b．太郎は今日公園で走っタ

（1a）のように，出来事の生起する時間が発話時と重なる場合は，現在時制のル形が用いられ，（1b）のように発話時の前に生起する場合には，過去時制のタ形が用いられる。

これに対して，アスペクトはある出来事の時間的な内部構成をどう見るかということであるから，例えば発話時に焦点をあてるとすると，発話時にその出来事が完了（perfective）しているか，それともまだ未完了（imperfective）なのかということを問題にする。例えば，（1a）においては，文法的形態素「テイル」が用いられているから，発話時，即ち現在時にはまだその行為が未完了であることを示す。一方，（1b）では，テンスが過去であるから，発話時にはもうその行為が完了していることを示す。アスペクトには，このように，完了と未完了の2種類があると言われており，アスペクトはある事態がある一定の時間的インターバルにおいて，どのような様相を示すかを文法的に述べる働きをする。

日本語ではアスペクトを表わすと思われる文法形式には，「テイル」の他に，「～カケル」「～ツツアル」「テアル」「～タ」「テシマッタ」などがある。しかし，本稿は「テイル」に的を絞って，その意味の分析を行ない，意味の一般性を求めようとするものである。意味の一般化を試み

るのに，特に Smith（1992）の言語形式のみならず語用論的な側面をも考慮に入れた包括的な理論が極めて有効であると思われる。

2. Smith（1992）の理論

2.1 Smith 理論の全体像

Smith（1992：5）は，文には 2 種類のタイプのアスペクト情報があると述べている。この 2 種類は，状況（situation）タイプと視点（viewpoint）タイプと呼ばれるものである。この 2 つのタイプは文に一緒に現われるが，それぞれ別個のものである。状況タイプは，動詞あるいはその動詞が義務的にとる目的語や補部などの表わすアスペクト形式であり，状況についての基本的な意味情報は，文法の辞書の中に記載されているとする。これに対して，視点タイプは，動詞句の一部を構成する文法的形態素によって示される。

(2) a．太郎は学校まで走って行っタ
　　b．太郎は学校に向かって走っテイタ
　　c．太郎は公園の周りを走っタ

(2a）では「走る」という行為は完了している―目標地点（goal）である学校まで走って行ったことを示す。Smith はこれを自然な終結点（natural endpoint）に到達している―行為が完結している―と言う。(2b）では過去のある一時点で「走る」という行為が進行していること―その時点にその行為が未完了であること―を示している。(2c）も（2a）と同様に「走る」という行為が完了していることを表わすが，(2a）との違いも存在する。(2c）には到達目標（goal）がなく，自分のやめたいと思う時までいくらでも「走る」という行為を続けることができる。Smith は（2c）のような場合を任意の終結点（arbitrary endpoint）に到達している―その行為が終結して（terminated）いる―と言う。

視点（タイプ）のアスペクトとは，時間が経過して行く中で，ある出来事が始まり終結するまでの時間の幅（temporal interval）全体に，あるいはその一部分にだけ焦点が当たっているかどうかを示すものである。(2a）と（2c）では視点のアスペクトはその行為が始まり終わるまでの全体に焦点を当てており，完了の視点を表わす。一方，(2b）ではその行為の一部分にしか焦点が当てられていないので，未完了の視点を表わす。

Smith（1992：167）では，このようなアスペクトの意味解釈の規則は，統語的な様々な規則や条件の適応された後の表層構造に適応されることになる。

2.2 状況タイプのアスペクト

Smith（1992：27–64）は，状況タイプの基本的なアスペクトを，素性（features）をもとに

5つの種類に分類している。この5種類を表に示すならば(3)のように表わされる。

(3) 状況タイプのアスペクト

状況（situations）	静態性（static）	継続性（durative）	完結性（telic）
状態（states）	[+]	[+]	——
活動（activity）	[−]	[+]	[−]
完成（accomplishment）	[−]	[+]	[+]
一過性（semelfactive）	[−]	[−]	[−]
達成（achievement）	[−]	[−]	[+]

状態タイプのアスペクト特性を持つ動詞は，「いる」や「ある」，「できる（能力）」などの動きを表わさない，静的な状態動詞であり，このような動詞には［完結性］という特性は当てはまらない。状態動詞以外の動詞は全て動きを表わす，動的な動詞である。活動タイプの特性を持つ動詞は，「笑う」「走る」「歩く」「待つ」などの，動きに一定の持続時間（[+ 継続性]）があり，これらの行為は行為者がやめようと思う時点まで継続する（[− 完結性]），即ち自然な終結点を持たないものである。完成タイプの特性を持つ動詞は，「太る」「生える」「疲れる」などの，動きに一定の持続時間が必要であり，かつ何らかの到達点（[+ 完結性]）—自然な終結点—のあるものである。一過性タイプの特性を持つ動詞は，「叩く」「打つ」などのそれ自体単一の動き（[− 継続性]）を表わし，行為者がやめようと思うまで繰り返すことができる（[− 完結性]）—自然な終結点を持たない—ものである。達成タイプの特性を持つ動詞は，「始まる」「終わる」「倒れる」「着く」「死ぬ」などの，ある状況から別の状況へ—瞬のうちに変わる（[− 継続性]）ことを表わし，必ず何らかの帰結をもたらす（[+ 完結性]）ものである。

2.3 視点タイプのアスペクト

Smith（1992 : 91）によると，視点タイプのアスペクトはカメラのレンズのように，受け取る側（即ち，聞き手）にある対象が見えるようにさせるもの，言い換えれば動詞（句）の持つ状況の情報こそが視点のレンズの焦点が向けられるものである。従来の伝統的な見方に従えば，視点には完了（perfective）の視点と未完了（imperfective）の視点の2種類があることになる[1]。上記(2)の例で考えて見るならば，（2a）と（2c）においては「走る」という行為が終結したことを表わすので，視点のアスペクトは行為の始点から終結点までの時間的な幅全体に焦点を当てている。一方，（2b）においては，「走る」という行為の始点から終結点までの時間的な幅のうちの一部にのみ焦点が当てられていることになる。従って，（2a）と（2c）は完了の視点アスペクトを表わす文であり，（2b）は未完了の視点アスペクトを表わす文である。

「完了」と「未完了」の違いは（論理的）含意（entailment）をもとに述べることができる。もし（2a）が真であるとすれば（2b）も真であるが，この逆の含意は成り立たない—「太郎が

学校に向かって走っていた」からと言って必ずしも「学校まで走って行った」ことにはならない。疲れて途中から歩いて行ったかもしれないし，途中で学校に行くのをやめたかもしれないからである。

3. 国語学における「テイル」の意味分析

日本語の文法形式「テイル」は，多くの点で英語の進行形形態素 *be-ing* と振舞いが似ているが，いくつか相違も見られる。

(4) a．犬が吠えテイル（A dog is barking.）

b．桜の木が一本倒れテイル（One of the cherry trees has fallen down.）

c．この作品は優れテイル（This work is an excellent one.）

（4a）の「テイル」は進行を表わす―吠えるという犬の行為が今進行していることが表わされている。（4b）の表わすのは結果の状態―桜の木が発話時以前に倒れ，その状態が依然として続いていること―である。（4c）は単なる状態を表わし，動的な動詞が持つ様な（動作の）過程や段階という意味は表わされていない。ここでは単に優れているという現在の状態が述べられている[2]。

金田一（1950/1976）は，この様な「テイル」の意味の違いは，共起する動詞のタイプによるものであると主張し，動詞を（意味から）「状態動詞」「継続動詞」「瞬間動詞」「第四種の動詞」に分類した。状態動詞は「テイル」形が共起しない動詞であり，第四種の動詞とは「テイル」形が常に共起し，現在・過去・未来という時間的観念を含まない動詞である[3]。金田一（1950/1976）は，国語学におけるその後の「テイル」の研究―例えば，高橋（1969），鈴木（(1972)(1976)），藤井（1976），吉川（1976）など―の出発点となった。

これらの研究は，動詞の（意味の）タイプをもとに「テイル」の意味を分析したものであるが，動詞をその意味によって分類する場合や動詞の意味のタイプと「テイル」の意味との関係について述べる場合に，分析上の厳密な基準が示されておらず，曖昧なことが多い[4]。

寺村（1984：125－146）は「テイル」形を，アスペクトタイプと形容詞タイプという2つの基本的な意味に分類している。アスペクトタイプの中心的な意味は，あることが実現して，それが終わってしまわず，その結果が何らかの形で現在に存在している（残っている）ということである。上記の例で見るならば，（4a）と（4b）がアスペクトタイプの例である。一方，形容詞タイプの意味は，ある事態の状態や特徴，様子，印象を述べるものである。上記の例でいうと，（4c）がこれにあたる。寺村は，形容詞的な意味を表わす動詞は動きや過程を表わさないと述べている。（4a）と（4b）では動きや状況の変化が述べられているが，（4c）では動きや変化は何も述べられていないということになる。

寺村の主張の中で最も評価すべき点は，「テイル」の意味を一般化している―アスペクトタイプと形容詞タイプの2つを認める―ということであるが，このような相違は，今までの様々な研究者が主張するように「テイル」の意味の相違であると果して言えようか。意味の相違と言われるものは，共起する動詞（句）のタイプに依る訳であるから，「テイル」の持つ何らかの特性によって，共起する動詞（句）全体がアスペクト的意味を表わしたり，形容詞的意味を表わしたりすると考えた方が妥当であろう。以下では，この点について考察を試みる。

4.　日本語の状況タイプのアスペクト

「動詞＋テイル」形式のアスペクト的意味は，この動詞の意味特性に大いに依存する。しかし，動詞の意味特性がアスペクト形式の表わす意味を決定する唯一の要因ではない（この点については4.4節で述べる）。4節では，アスペクトの意味に大きな影響を与える動詞の意味特性―Smith（1992）では状況タイプのアスペクトと呼ぶ―について，日本語のケースを考察する。

4.1　状態の状況

状態動詞は動きも過程も表わさず，静的な状況のみを述べる。ある時間の幅（temporal interval）においては何も変化がおこらず，状況を形作っているのはこの一定な変化のないインターバルである。

Smith（1992：37）は状態動詞の一般的な状況を次のような時間図表に示している。

(5)　状態動詞の時間図表

(I)――――(F)

状態動詞の表わす状況は過程や段階を全く含まない単一の期間からなる。始点Iはある状況がスタートする時点であり，終結点Fはその状態が終わり，別の状況がスタートする時点である。IもFもその状態自体ではないから，（　）で括られることになる。

以下は日本語の状態動詞の例である[5]。

(6)　a．家には犬が2匹いル

b．私はもっとお金が要ル

c．あの人の行動は賞賛に値すル

統語的にはこのような動詞は「テイル」形と共起できない（金田一（1950/1976：7））し，命令形を持たない。

4.2 活動と完成の状況

活動と完成の状況を示す動詞は，文字どおり活動（肉体的活動や精神的活動など）を表わす，動的な非状態動詞である。活動の中には，完成したり終結するのに，時間の幅（temporal interval）が必要なものがある。時間の幅はある事態の進行する過程や段階からなる。即ち，過程や段階の伴う事態を表わす動詞の状況には，(7)に示すように，2つの時点が必要である（Smith 1992：45－49）。

(7) 活動動詞と完成動詞の時間図表

I……F

図表(7)の時点 I は段階や過程の開始時点を表わし，F は終結時点を表わす。(7)の点線は終結点目指して進行する事態の段階ないしは過程を表わす。

次に明確にしなければならない区別は，上記(3)で示したように，これらの動詞が［＋完結性］と［－完結性］のどちらの特性を持つかということである。［－完結性］を示す動詞であれば，任意の終結点（arbitrary final point）を持つ動詞（句）―例えば，公園を歩くとすれば，歩くのをやめたいと自分で思う時にいつでも，即ち任意の時点でやめることができる―である。この任意の時点が(7)の終結点 F である。一方，［＋完結性］を示す動詞は自然な終結点（natural final point）を持つ動詞（句）―例えば，公園まで走るとすれば，走るという行為は公園に到着した時点で終結する―である。即ち，走るという行為の最終段階は公園に着いた時点であり，この時点が(7)の終結点 F である（Smith（1992：44−55））。

［－完結性］素性を持つ動詞は，活動の状況を示す動詞であり，［＋完結性］素性を持つのが完成の状況を示す動詞である。(8)が活動の状況の例であり，(9)が完成の状況の例である。

(8) a．子供達は童謡を歌っタ

b．生徒達はプールで泳いダ

(9) a．彼女はこの頃少し太っタ

b．庭に雑草が生えタ

これらは全て継続的な動的動詞である。(8)の例は一定の時間活動が続いたことを，(9)の例は一定の時間の経過とともに何らかの変化が生じたことを表わしている。

4.3 一過性と達成の状況

他の非状態・動的動詞には一過性と達成の状況を表わすものがある。これらの動詞を特徴付けるのは，［－継続性］素性であり，一般に瞬間動詞と呼ばれるものである。これらの時間図表は以下のように示すことができよう（Smith（1992：55－60））。

(10)　a．一過性動詞の時間図表　　b．達成動詞の時間図表

I　　$....I(R)....$

F　　F

一過性動詞の状況は単一の（瞬間的な）段階からなり，その状況の前段階も結果の段階も存在しない。これらの動詞は［－ 完結性］素性によって特徴付けられる。ドアを叩いたと言えば，叩くという行為は一回の瞬間的な行為によってか，あるいは一回の瞬間的な行為を何度か繰り返すことによって示される。この叩くという行為をやめようと思うまで何度も繰り返すことができるのは，前にも述べたように，［－ 完結性］特性に依るのである。

達成の状況は状態の突然の変化を示す。だから（10b）の点線で表わされているように，変化が起こる前に何らかの前段階があると見なすことができる。さらに，この変化は（10b）で記号 R で示されているように，何んらかの結果（の段階）を引き起こすと考えられる。例えば，窓が割れたとすれば，窓に向かって石が投げられるというような何か前段階があり，窓が割れるという突然の変化の後に，その結果の影響や状態が何か続くと考えられる。

(11)が一過性の状況の例であり，(12)が達成の状況の例である。

(11)　a．ばちで太鼓を打っタ

　　b．鳥が羽ばたきをしタ

(12)　a．講演は6時に始まル

　　b．中近東で戦争が起こっタ

　　c．この本に誤植を見つけタ

日本語の［－ 継続性］動詞の中で，［＋ 完結性］動詞は多数見つけることができるが，［－ 完結性］動詞の数は少ない。

4.4　状況の基本的な情報と状況アスペクトの解釈

動詞はそれぞれ固有の基本的な意味情報として，辞書（lexicon）に状況の意味も記載している。例えば，走るや歩くは状況の意味として，［－ 状態性；＋ 継続性；－ 完結性］という情報，即ち基本的には活動の状況を表わす動詞としての情報が記載されている。ところが(13)のような例を見てみよう。

(13)　a．6時まで走っタ

　　b．恋人のもとに走っタ

　　c．30分（間）ゆっくり歩いタ

　　d．公園まで歩いタ

(13)のように，下線で示したような表現が文脈に加わると，動詞句全体が完成の状況―［＋ 完結性］素性を持つようになる―を表わすようになる。走るや歩くの基本的な状況の意味情報は［－

完結性］であったのが，何故このように変化するのであろうか。

文脈が加わることによって，［－ 完結性］から［＋ 完結性］へと表現自体の読みが変わるとなると，6時までや30分（間）に読みを変更させる原因があると考えなければならない。特に，6時までや公園までに用いられている後置詞（＝ 助詞）の「マデ」は，目標の時点や地点を示す文法的機能を有する。従って，この「マデ」が辞書の中に［＋ 完結性］という固有の意味情報を持っていると考えることにする。なお，後置詞の「ニ」も目的の地点を表わすので，［＋ 完結性］という意味情報を持っており，何時間や何分間という時の表現もその時間が終了したらそこに表わされた状況が終了することになるから，［＋ 完結性］の意味情報を持っていると考えることにする。

この考えが間違っていないことを確かめるために，基本的な意味情報として，［－ 完結性］特性を持つもう1つの動詞の状況タイプである一過性の動詞叩くについて考察して見よう。

⒁　Aは中から誰かが出て来るまでドアを叩いタ

この例では，叩くという1回の瞬間的な行為を繰り返して，「マデ」の示した時点で終結させたことが表わされている。ここでも「マデ」は［＋ 完結性］を持っていることが明らかである。

このように考えると1つ問題となるのは，表現全体の状況タイプのアスペクトの意味を解釈する時に，動詞の表わす状況の意味特性よりも，後置詞句の意味特性の方が優先するということである。これは何も後置詞だけの問題ではない。いつもや毎朝，時々，頻繁になどの，いわゆる頻度の副詞が現われると動詞の基本的な状況アスペクトの意味特性が現われない。

⒂　a．私は毎朝公園まで歩ク

　　b．清原は最近（よく）ホームランを打ツ

　　c．その地域では頻繁に戦争が起こル

歩くは活動の，打つは一過性の，起こるは達成の状況を示す動詞である。さらに，（15a）の公園まで歩くは「マデ」によって，完成の状況を示す。しかし，⒂の例は全て，反復繰り返し，即ち習慣の意味を表わす。習慣というのは，行為の進行と類似した，終結点が示されない，言わば［－ 完結性］特性を持つ活動タイプと同様の状況を表わすのである。Smith（1992：182－186）はこれを派生活動状況（derived activity situation）と呼ぶ。なお，文全体の状況アスペクトの意味を決定する際に，（15a）で示されるように，頻度の副詞の方が後置詞「マデ」に優先することは明らかである[6]。

前述のように，アスペクトの意味解釈の規則は，統語的な規則や条件が適用された後の表層構造に適用される。状況のアスペクトの意味の解釈に，表層構造のどのような統語情報と意味情報が関わるか，（13d）を例にとって考察してみる。

⑯ （13d）の状況アスペクトに関わる統語・意味情報

$[_{S}\ [_{VP}\ [_{PP}\ [_{NP}$ 公園$]\ [_{P}$ まで$]]\quad [_{V}$ 歩いタ$]]]$

{[＋ 完結性]}{[＋ 継続性；－ 完結性]}

⟹ {完成（活動）}

ここの表記で，S は文を，VP は動詞句を，V は動詞を，NP は名詞句を，PP は後置詞句を，P は後置詞をそれぞれ表わす。また［　］は統語上の情報を，｛　｝は意味上の情報を表わすとする。状況のアスペクト解釈規則は，⑯においては完成の状況の意味を表わすと解釈するが，動詞自体の状況の意味（この場合は，活動の状況）も依然として文の背後に維持されていると考えることとする。

5.　日本語の視点タイプのアスペクト

日本語のテンスの形態「ル」と「タ」，アスペクトの形態「テイル」などは，時間の座標軸上のある時点―例えば，発話時（＝現在時）―を基準とする時間の幅（temporal interval）全部に焦点を当てるのか，部分的に焦点を当てるのかを示す文法的な形態素である。

⑰ a．花子はそれを聞いて笑っタ

b．花子はその時笑っテイタ

例えば，（17a）では過去のテンスの形態素「タ」が引金となって，視点のアスペクトは，過去のある時点―この場合は，それを聞いた時点―を基準に，その前後のインターバル全体に焦点を当てることになる。従って，（17a）の視点のアスペクトは完了の意味を表わす。一方，（17b）では，形態素「テイタ」によって，視点のアスペクトは過去の一時点―その時―を基準にしたインターバルの一部に焦点を当てることになる。この場合の視点アスペクトの意味は未完了である。

さて，日本語のアスペクト形式の１つである「テイル」形は，［－ 状態性］素性を持つ動詞とのみ共起し，いくつかのタイプの読みを引き起こすと言われて来た。これは正に英語の進行形アスペクトの形態素 *be-ing* と同じである。英語の *be-ing* 形も状態動詞と共起できないし，進行形自体にいくつかの意味や用法がある（詳細は浅川・鎌田（1986：111－163）参照）。どのようなタイプの読みなのかは，「テイル」や *be-ing* と共起する動詞や副詞などの状況アスペクトの意味情報に依るのである。

5.1　活動の状況と「テイル」

「テイル」が，次の⑱に挙げるような活動の状況を示す動詞と共起した場合，そこで述べられている事態は進行中であり，時間の幅（temporal interval）における基準の時点ではまだ完了していないという読みが一般に得られる。

(18)　a．子供達は童謡を歌っテイル

　　b．生徒達はプールで泳いデイル

視点のアスペクトは，(18)のような状況では，どこに焦点を当てるかを概略的に図表化すると(19)のようになる。

(19)　I…////…F

　　↑

　　基準の時点（(18)では現在時）

(18)の各文がアスペクトの解釈規則のインプットになる表層文であり，ここではテンスは現在であるから，視点の焦点が当てられる基準時は現在時ということになる。この基準時を中心とした一部分の時間の幅のみに焦点を当て（(19)の図表の斜線部 //// が視点の当てられている部分），この間の事態の進展について言及するのが(18)のような活動の状況の場合の「テイル」の働きである。

5.2　［＋完結性］の状況と「テイル」

［＋完結性］特性を表わす状況のアスペクトは完成と達成の状況である。次の(20)が完成の状況の例であり，(21)が達成の状況の例である。

(20)　a．父は長旅で疲れテイル

　　b．庭に雑草がいっぱい生えテイル

(21)　a．講演は6時に始まっテイル

　　b．桜の木が一本倒れテイル

このような［＋完結性］の状況表わす場合，「テイル」が時間の座標軸で焦点を当てるのは，ある事態がもうすでに完結してしまった終結点 F の後に来るある時点（(20)と(21)では現在時）を基準にした前後の一部分のインターバルである。このような状況における視点アスペクトのもたらす意味は，その事態の起こった結果が依然として続いている―即ち，結果が未完了―ということである。(20)と(21)のような状況では，視点のアスペクトはどこに焦点を当てるかを概略的に図表化するとそれぞれ（(22a）と（22b)）のようになる。

(22)　a．完成の状況　　b．達成の状況

　　I …F …//// …　　…I …////…

　　↑　　F　↑

　　基準時（(20)では現在時）　　基準時（(21)では現在時）

(22)　の斜線部が視点のアスペクトが焦点を当てている箇所である。

5.3　一過性の状況と「テイル」

一過性状況を示す動詞が「テイル」と共起するとどうなるか考察する。

(23)　a．父が庭でゴルフボールを打っテイル

　　b．鳥が一羽羽ばたいテイル

このように，一過性動詞が「テイル」形と共起すると，時間の座標軸の基準時を中心とした前後のインターバルで，単一の出来事が繰り返されていることが意味される。「テイル」はこの繰り返しが続いていることを述べるものであるから，依然として未完了の意味を与えていることになる。Smith（1992：56）は，(23)のような文は，複合的な出来事（multiple-event）を表わす活動状況の意味を持つとしている。(24)が(23)の「テイル」の意味を概略的に図表化したものである。

(24)　一過性状況における「テイル」の働き

……*I I I I I I I I* ……

　　FFFFFFFF

　　/////

　　↑

　　基準時（(23)では現在時）

(24)の斜線が視点の当てられている部分であり，この間打つや羽ばたくという単一の行為が繰り返され続けていることを表わしている。「テイル」によって，この様な繰り返しが進行中であり，まだ完了していないことが示される。このように考えると，(24)の場合は上記(19)で示した活動の状況と類似性が見られる。そのために，Smith は(24)のような場合を派生活動（derived activity）と呼ぶ。

5.4　派生状況と「テイル」

4.4 節では，文中にある特定の副詞や後置詞が現れると，その文全体の状況アスペクトの読みが変わることを述べた。この節では，派生された状況と「テイル」との関わりについて考察する。

(25)　a．父はいつも推理小説を読んデイル

　　b．清原はこの頃ホームランを打っテイル

　　c．私は最近よく映画館に行っテイル

(25)は全て繰り返し（文脈によっては，繰り返しは習慣になる）の例である。基本的な状況のアスペクトは，読むが活動，打つが一過性，行くが達成である。また(25)で用いられている副詞，いつもやこの頃，最近は皆ある時間的な長さの中で何かが進行する意味を表わすので，そのアスペクト特性として［＋継続性；－完結性］素性を持っている―即ち，活動のアスペクト特性を示す―としよう。(25)の状況のアスペクトの意味を表記すると，(25′）のようになる（なお，（　）は動詞の表わす基本的な状況のアスペクトである)。

（25′）a′．{活動（活動）}

b′．{活動（一過性）}

c′．{活動（達成）}

このように活動の状況アスペクト特性を持つ副詞が現われる文は，派生活動状況を示す文として機能し，基本的状況がどうであれ，事態の繰り返し―特に習慣的行為―の意味を表わす。即ち，上記(19)で概略を図表化した活動状況に対する視点アスペクトの焦点と同様に，(25)における「テイル」アスペクトの視点は，基準時（(25)では現在時）の前後のインターバルにおける事態の（繰り返し）進行に焦点を当てているのである。

(26)　a．その本ならもう読んデイルよ

b．松井はすでに30本もホームランを打っテイルよ

(26)に用いられている動詞，読むと打つはそれぞれ活動と一過性の基本的状況アスペクトを示す。しかし（26a）は事態の進行を表わさないし，（26b）は単一の出来事の単なる繰り返しを表わすものではない。むしろ(26)は事態の結果がまだ継続していることを表わす。ここで用いられている副詞，もうとすでには状況アスペクトの特性として，［＋ 完結性］素性を有する副詞である。これによって，（26′）に示すような派生状況が得られる。

（26′）a′．{［＋ 完結性］（［＋ 継続性；－ 完結性］）}

⟹ {完成（活動）}

b′．{［＋ 完結性］（［－ 継続性；－ 完結性］）}

⟹ {達成（一過性）}

この様に副詞の状況特性と動詞の状況特性の組合わせによって，（26a）は派生完成状況（derived accomplishment situation）として，（26b）は派生達成状況（derived achievement situation）として解釈される。従って，（26a）は（22a）と，（26b）は（22b）と同様の視点の概略図表で表わすことができよう。

6.　アスペクトの意味表示―Smith（1992）に基づいて

この節ではSmith（1992：187－213）に従って，日本語アスペクトの意味の表示を試みる。Smith（1992：193）では，文に現われる状態や出来事は意味表示の中に実体（entities）［*e*］として導入されるとする。状況のタイプを特徴付ける特性は意味表示の中で，実体に対する［完結性］や［継続性］のような条件として現われる。例えば，ある文の出来事が［完結性］という特性を持ち，その終端が見えるなら，その終結点は自然な終結点であると推論される。［＋ 完結性］という特性を持つ出来事が未完了の視点から述べられれば，その未完了は日本語では結果のインターバルを示すと推論される[7]。

「ル（タ）」や「テイル（テイタ）」などの視点の形態素は意味表示に時間の幅（temporal interval）［I］を導入する。それぞれの視点形態素は状況のどの部分を見えるようにするのか，即ち［e］の終結点あるいは内的な段階をもとに，［I］がどのような特性を持つかを指定する働きがある。完了の視点は状況の終結点を見えるようにするので，［e］の始点も終結点も見えることになる。Smith（1992：194）では，［e］の始点を $I(e)$ と，終結点を $F(e)$ と表記する。［I］は瞬間（instant）が並んだものとして捉え，［I］を構成する最初の瞬間を［t_i］，最後の瞬間を［t_j］と表わす。完了の視点では［t_i］が $I(e)$ で，［t_j］が $F(e)$ で生起すると見なす。なお，以下の表記において，$a < b$ は a が b に時間的に先行することを表わす。以上のことを踏まえた上で，日本語アスペクトの意味の表示がどのようなものか考察する。

6.1　完了の視点の意味表示

最初に，完了の視点から見た活動の状況について，その意味表示を考察する。

(27)　子供達は童謡を歌っタ（活動）

1. e =［子供達は童謡を歌う］ウタウ（x, y）
2. e = {活動}
3. {視点（I, e）= 完了}
4. x = 子供達
5. y = 童謡
6. $t_{i,j} \in$ I
7. $t_i = I(e)$, $t_j = F(e)$
8. $t \in$ I, $t > t_i$, $t < t_j$
9. I < 発話時

(27)は概略的な意味表示であるが，1行目では実体［e］は［子供達は童謡を歌う］であり，ウタウという述語は2つの項（argument）をとることが示される。なお，この2つの項 x と y の値を指定したのが4行目と5行目である。2行目では［e］の状況アスペクトが活動であることが示され，3行目では視点アスペクトが完了であることが示される。6行目では t_i と t_j が時間の幅［I］に含まれることが，7行目では t_i が［I］の始点であり，t_j が終結点であることが表示される。さらにこの2行から，完了の視点であることが示される。8行目は［I］の幅は，$t_i < t < t_j$ からなること，即ちこの事態が終結するまでには時間の幅が必要なこと（[+ 継続性] 特性ががあること）が示されている。9行目は最も概略的に表示されたものであるが，［I］が発話時に先行すること，つまり過去のある期間に事態が起こったことが示されている。

今度は完了の視点から見た達成の状況アスペクトの意味表記を考察する。

(28) 講演が始まっタ（達成）

1. e = [講演が始まる] ハジマル（x）
2. e = {達成}
3. e = {視点（I, e）= 完了}
4. x = 講演
5. I = $\{t_i\}$
6. $t_i = (e)$
7. $t \in$ I, $t > t_i$, $t < t_i$
8. I < 発話時

5行目では［I］が少なくとも単一の瞬間t_iから成ること，6行目ではt_iの時点で［e］が満たされること，7行目では，［I］にある瞬間tが含まれていたとしても，このtはt_iに先行し，かつ後行すること，即ちここで述べられている状況が［－継続性］特性を持つものであることが示されている。なお6行目では，状況全体に視点の焦点が当てられていることを述べているので，ここでは完了の視点であることが示されている。

6.2 未完了の視点の意味表示

最初に，未完了の視点から見た活動の状況の意味表記を考察する。

(29) 父は公園を走っテイタ（活動）

1. e = [父は公園を走る] ハシル（x, y）
2. e = {活動}
3. e = {視点（I, e）= 未完了}
4. x = 父
5. y = 公園
6. $t \in e$
7. $t \in$ I $\rightarrow t \neq I(e)$, $t > I(e)$
8. $t \in$ I $\rightarrow t \neq F(e)$, $t < F(e)$
9. I < 発話時

7行目と8行目では，ある瞬間tは時間の幅［I］の一部を構成はしているが，状況の始点Iの時点ではないし，終結点Fの時点でもなく，IとFとの間に存在する時点であるということが示される。また6行目はこの任意の時点tが状況の一部であること，即ち状況の一部にのみ視点の焦点が当てられていること（未完了の視点であること）を表わしている。

次に，未完了の視点から見た達成の状況の意味表記を考察してみよう。

(30) 桜の木が倒れテイル：結果の状態

1. e =［桜の木が倒れる］タオレル（x）
2. e = {達成}
3. e = {視点（I, e）= 未完了}
4. x = 桜の木
5. t
6. $t \in \mathrm{I} \rightarrow t \neq I(e),\ F(e)$
7. $t \in \mathrm{I} \rightarrow t > F(e)$
8. 発話時 $\in$ I

5行目では任意の時点 t があることが示されている。6行目と7行目では，この t が時間の幅Iの一部を構成しているが，この t は桜の木が倒れるという状況の始点でも終結点でもないこと，倒れるという事態の起こった後の時点であることが示されている。8行目では発話時がIの一部を構成していること—Iに含まれていること—を表わす。7で示すように，t の終結時点が指定されていないので，このような場合を結果の状態と言うことにする。

6.3 習慣的行為と意味表示

次に，習慣的行為—即ち繰り返し—の場合の意味表示について考察する。(31)は完了の視点の場合であり，(32)は未完了の視点の場合である。

(31) 祖父は毎日公園を散歩しタ：継続状態

1. e =［祖父は公園を散歩する］サンポスル（x, y）
2. e = {状態（活動）}
3. e = {視点（I, e）= 完了}
4. x = 祖父
5. y = 公園
6. $t_i = I(e),\ t_i < \mathrm{I}$
7. $t_j = F(e),\ t_j > \mathrm{I}$
8. I < 発話時
9. $z \rightarrow e', \mathrm{I}'$
10. 日（z）e'：［祖父は公園を散歩する］

    ［− 完結性］

    ［+ 継続性］

    段階特性

    視点（I′, e'）= 完了

$t_{i,j} \in \mathrm{I}'$

$t_i = I(e'),\ t_j = F(e')$

$t \in \mathrm{I}',\ t > t_i,\ t < t_j$

(31)では公園を散歩するという行為を祖父が毎日繰り返したことを述べたものであり，一日一日の行為は9行目と10行目以下の諸表記で表わされている。ある一日では，継続特性のある($t \in \mathrm{I}',\ t > t_i,\ t < t_j$) 散歩するという行為が完了する（$t_{i,j} \in \mathrm{I}'$ と $t_i = I(e'),\ t_j = F(e')$）ことが示される。この一日一日の行為の繰り返し期間がIである。6行目と7行目の表示から，この繰り返し期間が終結したことが述べられる。このように，ある事態がインターバルIにおいて，繰り返し継続的に生起したことは，その期間一定の状態が変化なく続く訳であるから，これを継続状態と言うことにする。

次に，未完了の「テイル」形アスペクトを用いた習慣の状態について考察する。

(32) 私は毎朝ジョギングしテイル：継続状態

1. e = [私はジョギングする] ジョギングスル（x）
2. e = {状態（活動）}
3. e = {視点（I, e）= 未完了}
4. x = 私
5. $t \in \mathrm{I} \rightarrow t \neq I(e),\ t > I(e)$
6. $t \in \mathrm{I} \rightarrow t \neq F(e),\ t < F(e)$
7. 発話時 $\in$ I
8. $z \rightarrow e',\ \mathrm{I}'$
9. 朝（z）　e'：[私はジョギングする]

   [− 完結性]

   [+ 継続性]

   段階特性

   視点（I′, e'）= 完了

   $t_{i,j} \in \mathrm{I}'$

   $t_i = I(e'),\ t_j = F(e')$

   $t \in \mathrm{I}',\ t > t_i,\ t < t_j$

5〜7行目は，この行為が発話時（= 現在時）を含めた時間の幅（インターバル）Iにおいて，まだこの行為が続いていることを示す。8行目と9行目ではジョギングという［+ 継続性］特性のある行為（[e']）が朝ごとに，サブインターバルI′において完了することを示す。この［e'］が現在時も含むインターバルIにおいて継続的に繰り返されている—継続状態にある—ことが示されている。

7. 状態性とアスペクト形式

6節では，3種類の状態性について考察した。1つが未完了の視点アスペクトによる結果の状態であり，2つ目は完了の視点アスペクトによる継続状態，3つ目は未完了の視点アスペクトによる継続状態である。この節では，さらに別の状態性表現について考察する。

7.1 「ル」形式しか持たない状態動詞

状態の状況を示す動詞―ある，いる，できる（能力），要る，値する，など―は，アスペクト形式として，「ル（タ）」形式しか取れない。このような動詞のアスペクトの意味表示をまず考えてみよう。

(33) 父は隣の部屋にイル（状態）

1. e =［父は隣の部屋にいる］イル（x, y）
2. e = {状態}
3. e = {視点（I, e）= 完了}
4. x = 父
5. y = 隣の部屋
6. $t_{i,j} \in$ I
7. $t \in e$
8. $t \in$ I $\rightarrow t \neq I(e)$, $t > I(e)$
9. $t \in$ I $\rightarrow t \neq F(e)$, $t < F(e)$
10. 発話時 $\in$ I

6行目で示されるように，「ル（タ）」形で現われる状態動詞では，時間の幅Iの両端 t_i と t_j が表記される。t_i は父がその部屋に来た時点，即ち「いる」という状態の始まりを表わす時点である。t_j は父が部屋から出て行った時点，即ち「いる」という状態が終結する（した）時点である。このように，t_i と t_j は状態性状況の動詞の時間の幅Iの一部を構成している。だが重要な点は，このような動詞の視点アスペクトは，両端の時点 t_i と t_j には焦点を当てない。8行目と9行目で示すようにIの中間の一部の時点にのみ焦点を当てることになる。このような動詞にも6行目に挙げた表記が必要であることから，これらの状態動詞は完了の視点を表わすと言わなくてはならない（次に述べる「テイル（テイタ）」形で表わす状態は未完了の視点を示す）。しかし，8行目と9行目で示されるように，その時間の幅Iの中には始点 I も終結点 F も含まれないことを考えれば，未完了のアスペクトと類似している。

7.2　未完了アスペクトとのみ共起する状態性表現

金田一（1950/1976）で，常に「テイル」形と共起し単なる状態の意味を表わす第四種のタイプと分類されている動詞―寺村（1984）ではこの動詞と共起する「テイル」形はアスペクトタイプではなく形容詞タイプのものであるとする―についてはまだ触れていない。この動詞こそ日本語の「テイル」の意味を分析する上で重要な鍵を握っていると思われる。(34)が金田一の第四種の動詞と呼ぶ例である。

(34)　a．この作品はとても優れテイル

　　b．町のまん中に高い塔がそびえテイル

　　c．そんな話はばかげテイル

この例で用いられている「優れる」「そびえる」「ばかげる」は，文の主動詞として現われる時は，単独で終止形を取ることはなく，必ず「テイル（テイタ）」の形で現われる。またこれらの動詞の中には，連体修飾する時に「タ」形を用いても過去の意味が一切ないものがあることは広く知られている（例えば，寺村　1984：137－144）。

(35)　a．これはとても優れタ作品です

　　b．？高くそびえタ塔が町のどこからでも目に入ってくる

　　c．そんなばかげタ話は聞きたくない

(36)　a．これは今私の読んデイル本です

　　b．それは昨日私が読んダ本です

(35)と(36)を比べれば違いは明らかである。(35)では「タ」形を使っているからと言って何も過去のことを表わしているのではない。それに対して，読むが名詞を修飾する場合に，（36a）の「テイル」形は今行為の進行していることを，（36b）の「タ」形では過去の行為を表わしている。なお，（35b）はかなり座りが悪い文となっているが，その理由を考えてみる。「そびえる」という動詞は「気が付かないうちに，町のまん中に高い塔がそびえテイル」というような，結果の状態を強く表わす言い方が可能である。このような場合，「そびえる」という動詞は達成の状況アスペクトを有すると判断されよう。それに対して，「優れる」や「ばかげる」は修飾する名詞の持つ性質を表わすので，時間の座標軸の一点を区切る（上記の気が付かないうちにがこの区切る時点を示す）結果の状態の意味にはなりにくい（即ち，「優れる」「ばかげる」の方が「そびえる」に比べて形容詞性が強いということになろう）。

このような事実があるにもかかわらず，(34)のような場合の「テイル」形は，やはり視点のアスペクトとして機能していると見るのが合理的である。この場合も，発話時（＝現在時）を含む時間の幅（temporal interval）Ｉの一部分に焦点を当て，その状態について述べていると見ることができよう。「優れる」「そびえる」「ばかげる」において，時間の幅Ｉでは状況の始点 I と終

結点 F はともに見えない。この点はまさに状態動詞と同じである。敢えて始点と終結点を求めるならば次のようになるであろう。例えば，ある作品が発表され，この作品が他の作品より特に優れていると判断されたとする。この判断された時点が優れた状態が始まる始点と見なすことができよう。その後別の作品が発表され，これがさらに優れたものであると判断されたならば，前の作品の優れた状態は終わることになり，この時点が優れた状態の終結点である。状態動詞と類似しているとすれば，当然命令文は不可能になる（＊そびえよなどは命令された対象が擬人化されたような特殊な場合には可能かもしれない）。だが状態動詞では共起しない「テイル」が終止形では必要となる。それではこれらの動詞をどう扱えば良いのだろうか。

この疑問に答える前に，この種の例をもう少し見てみよう。

(37)　a．私は彼女をよく知っテイル

　　b．あの人はいつも堂々としテイル

(37)も(34)と同様に終止形の場合には「テイル」形を用いるのが普通であり，継続的な状態を示す[8]。名詞を修飾する場合，「知っタ」「堂々としタ」としても過去を表わさない。だが「自分のことをもっとよく知りなさい」「もっと堂々としなさい」というような命令形も可能である。この動詞の状況のアスペクト特性は，「起こる」「始まる」などの動詞と同じく［－ 継続性：＋ 完結性］素性を持つ達成の状況である。達成状況が「テイル」形と共起した場合，通常結果の状態になることが多いが(37)の場合は継続状態を示す。

もう一つ同じような例を考察する。

(38)　a．彼女はいつも白い服を着テイル

　　b．父は推理小説ばかり読んデイル

この場合も，発話時を基準点とする時間の幅 I での継続的状態について述べたものである。「着る」の状況アスペクトの特性は［－ 継続性：＋ 完結性］であり，「読む」の特性は［＋ 継続性：－ 完結性］である。このように色々な状況タイプの動詞が継続的な状態を表わすことができる。特に（38b）の場合は前節の(32)で示した習慣の状態と同じ意味表示を持ち，（38a）の場合も同じアスペクトの意味表示を持つであろう。

（37a）の意味表示を考察する。

(39)　私は彼女をよく知っテイル：継続状態

1. e ＝［私は彼女を知る］シル（x, y）
2. e ＝｛状態（達成）｝
3. e ＝｛視点（I, e）＝未完了｝
4. x ＝私
5. y ＝彼女
6. $t_i = I(e)$, $t_i <$ I

7. $t_j = F(e),\ t_j > \mathrm{I}$

8. 発話時 $\in \mathrm{I}$

9. $t \in e$

10. $t \in \mathrm{I} \rightarrow t \neq I(e),\ t > I(e)$

11. $t \in \mathrm{I} \rightarrow t \neq F(e),\ t < F(e)$

多くの達成動詞は，「テイル」形と共起すると結果の状態（(30)で示した意味表示）を示すが，「知る」や「堂々とする」などは達成の状況を表わす動詞でありながら，(39)で挙げるような未完了の意味表示（6行目と7行目）と状態動詞の意味表示（9〜11行目）を合わせ持つと考えられる。

このように仮定すると，金田一の言う第四種の動詞と呼ばれるものも，そのアスペクトの意味表示に，未完了の表示と状態動詞の表示を合わせ持つと考えた方が合理的であろう。従って，「優れる」「そびえる」「ばかげる」などのアスペクトの意味表示は，「知る」と同様(39)のようになると考えることとする。

7.3 「テイル」形と共起する状態性動詞の扱い

「知る」「堂々とする」などの動詞は，達成の状況を示す一方で，終止形は「テイル」形をとる（「知る」は理解するの意味を表わさない場合に）。また金田一の言う第四種の動詞は終止形に必ず「テイル」形をとり，単なる状態を示す。第四種と言われる動詞の状況アスペクトを，2節で述べた方法で，敢えて分析するならば，達成の状況に分類されるかもしれない。しかし，達成の状況を示す動詞は「テイル」形と共起すると，一般に結果の状態を表わす。それに対して，上記の動詞は単なる状態を表わすのであるから，何らかの相違がどこかにあるに違いない。

2節の達成アスペクトの分類では，英語と同様に，日本語にも「状態」「活動」「完成」「一過性」「達成」の5種類を認めた。ここでは，［静態性］特性が［＋］の値を示すのは状態動詞だけで，他はみな［－］の値を示す動的な動詞と分類されている。しかし，上記(34)(37)で挙げた「優れる」「そびえる」「ばかげる」「知る」「堂々とする」などには一切動的な特徴—即ち，過程や段階を示す特徴—が見られない。これらの動詞は，一方で達成動詞の特徴を持ち，他方で状態動詞の特徴を持つと言うことができる。ここに問題を解決する鍵が隠されていると思われる。

本稿では，(34)(37)に現われたような動詞を「非過程（non-processive）」という6番目の状況アスペクトを示す動詞と分類することにする。

(40) 状況タイプのアスペクト（追加修正）

状況（situations）	静態性（static）	継続性（durative）	完結性（telic）
状態（states）	［＋］	［＋］	——
活動（activity）	［－］	［＋］	［－］
完成（accomplishment）	［－］	［＋］	［＋］

一過性（semelfactive）	[−]	[−]	[−]
達成（achievement）	[−]	[−]	[+]
非過程(non-processive)	[+]	——	[+]

状態動詞には「完結性」特性が関与しないが，非過程動詞には「継続性」特性は関与しないとする。「優れる」「そびえる」が継続的な特徴を表わすのは未完了の視点アスペクトを示す文法形態素「テイル」を伴って初めて可能となるのである。言い換えれば，非過程動詞に「継続性」特性が一切関係ないから，継続性の意味を表わすのに「テイル」形が必須の要素になると言えよう。「完結性」特性が［+］の値を示すとすることによって，非過程動詞と達成動詞との意味的類似性が捉えられよう。さて，「知る」や「堂々とする」は「知っタ」「恥を知れ」「もっと堂々としなさい」などのように，達成の状況も示す。従って，これらの動詞は，達成と非過程の両方の状況アスペクトを表わすことができるとする。このように状況アスペクトを設定するならば，(39)の意味表示における2行目は e = {状態（非過程）} と表記し直されることになる。

8. 結　論

日本語のアスペクトの一形式である「テイル」の意味は，動詞表現の意味特性である状況アスペクトと「ル」や「テイル」によって導かれる完了・未完了の視点アスペクトという2つのレベルの複合システムを想定することによって，体系的に捉えることができる。

英語と同様に，日本語にも「状態」「活動」「完成」「一過性」「達成」という状況アスペクトが存在するが，本稿では更に日本語独特の「非過程」状況を想定した。「状態」状況を表わす動詞は「テイル」形と共起することができない。「活動」状況が「テイル」形と共起すれば，一般に事態が進行中で未完了であることを表わす。「完成」「達成」の状況が「テイル」形と共起すれば，一般に結果の状態を表わす。「一過性」の状況が「テイル」と共起すれば，繰り返し行為を表わす。なお，「活動」であれ，「完成」「達成」であれ，頻度の副詞が「テイル」とともに現われた場合には，行為の繰り返し（あるいは，習慣的行為）を表わす。日本語独自の「非過程」状況は，その特性から「テイル」形と必ず共起せざるを得ず，単なる状態を表わす。

この分析を通して，日本語の「テイル」表現形式は，例え動作の進行過程を表わす場合であれ，結果の状態や継続状態を表わす場合であれ，ある時間の幅［I］における事態の何らかの状態的な特性を表わしているのであり，違いは単に状態性が強く現われているのか否かのみである。「テイル」を用いた形式で最も状態性が強く現われるのは「非過程」状況の場合であり，このアスペクトの意味は「テイル」の共起しない状態の状況アスペクトの意味に極めて近いものである。

日本語には状態動詞と言われる動詞の数が極めて少ない。その理由は，日本語では状態動詞以外のタイプの動詞に「テイル」形を結び付けて色々な意味合いの状態性を表わすことができるた

めであろう。特に，「テイル」形と共起する非過程状況の動詞が状態動詞の数の不足を補っている最も明らかな例であろう。

本稿では，非過程動詞を仮定し，何故このタイプの動詞の終止形には「テイル」形が現われなければならないのかの説明を試みた。この非過程動詞についてまだ説明の付いていないことが1つある。それは何故連体修飾に用いられる時に，「ル」形・「タ」形のどちらが現われても意味が変わらないかという点である。「眼前にそびえる山々」「高くそびえた鉄塔が見える」などのように，「ル」形でも「タ」形でもその意味するところは変わらない。両者で明らかなことは，ここの場合のそびえるの意味は状態性を強く表わしていると言うよりも，ある時点の状況―この例では見ている時点の状況―を表わしていると言えよう。非過程動詞が「ル」形・「タ」形で用いられた場合に，ある時点の状況を意味し，現在・過去の時間の区別が無くなるのは，状況アスペクトの特性として［完結性］特性は持つが［継続性］特性とは一切関わりを持たないという所にあるのかもしれない。

日本語においても，状況アスペクトと視点アスペクトという2つのレベルのアスペクトを想定することによって，アスペクトの意味がより一層体系的に捉えることができる。

〈注釈〉

（1）Smith（1992）は，中国語やナヴァホ（アメリカインディアン）語には中立（neutral）の視点があると言うが，日本語の「ル」形と「テイル」形に関する限り，完了と未完了の視点しかない。

（2）英語で進行形が結果の状態を表わすことができるのは位置や場所を述べる動詞と進行形が共起する場合である（Smith（1992）：114−117）。次の（ｉ）（ii）がその具体例である。

（ｉ）Your socks were lying on the bed.

（ii）The statue is standing on the corner.

日本語の単なる状態を表わす動詞表現は，英語では形容詞表現で表わされることが多いので，日本語動詞独特の特徴かもしれない。

（3）金田一（1950/1976）によると，日本語の動詞には次のタイプがある。

第一種―状態を表わす動詞（状態動詞）
　　アル，イル，デキル，など
第二種―動作・作用を表わす動詞（継続動詞）
　　ヨム，カク，ワラウ，（雨ガ）フル，など
第三種―動作・作用を表わす動詞（瞬間動詞）
　　シヌ，ハジマル，オワル，トウチャクスル，など
第四種―ある状態を帯びることを表わす動詞
　　スグレル，ソビエル，ニル，など

第四種の動詞が時間的観念を含まないという端的な例は，これらの動詞が連体修飾形として用いられる場合である。

（ｉ）高くそびえるタワー

（ii）高くそびえた山々に囲まれて……

（ｉ）と（ii）の「ル」形と「タ」形の違いによって，表わされる時間的な意味に相違は生じない。従って，（ｉ）と（ii）の両方の後に，現在時制を伴う述語と過去時制を伴う述語のどちらも続くこと

ができる。

（iii）　その町ではどこからでも，高くそびえるタワーが目に飛び込んで｛来る／来た｝

（iv）　その町は四方を高くそびえた山々に囲まれて｛いる／いた｝

（4）　例えば，金田一（1950/1976）では，「国語に存在する総ての動詞が右の（本稿では上記の注釈（3）で挙げた）分類の一つにうまくおさまる」というわけではなく，二つ以上の項目にまたがるものが非常に多いと述べている。しかし，本稿で後で触れるように，様々な文脈上の条件によって動詞の意味的働きが変わることが多いのである。このように，これらの研究では動詞本来の特徴なのか，それとも文脈に付随した他の要件によるものなのかの区別が特に曖昧である。

（5）　英語と比べて，日本語には状態動詞の数は少ない。英語で状態動詞に分類される *know*, *love*, *belong to*, *own* などは，日本語では［－継続性：＋完結性］特性を持つ非状態動詞である。

（6）　優先順位は動詞句（VP）の構成関係で決まると考えられる。例えば，（15a）の動詞句構成関係は概略次のように示すことができる。

（i）　［$_{VP1}$（毎朝）［$_{VP2}$（公園まで）［$_{V}$ 歩く］］］

後置詞句公園までが動詞歩くと一緒になって動詞句^{2}を構成するが，さらに頻度の副詞毎朝が動詞句^{2}と一緒になってより大きな単位の動詞句^{1}を構成している。従って，文全体の状況アスペクトの意味を決定する時に，より大きな単位を構成する毎朝の方が公園までよりも優先順位にあるのである。

（7）　英語では［＋完結性］という特性を持つ出来事が未完了という視点から述べられれば，その未完了はその出来事が起こる前の段階（preliminary stages）―即ち，始点 *I* に先立つ段階―に焦点が当てられる。例えば，次の(ｉ)などがその例になる。

（i）　They are reaching the top.

日本語では［＋完結性］特性が未完了の視点から述べられれば結果の状態を表わすということは，即ち終結点 *F* の後の段階に視点の焦点が当てられるということになる。未完了視点からの［＋完結性］特性に関して，日本語と英語では焦点を当てるインターバルの位置が対称的である。

（8）「知る」でも理解する・分かるという意味の時は，終止形でも「ル（タ）」形をとることができる。命令形になることができる「知る」は，理解するの意味である。

参考文献

1. 浅川照夫・鎌田精三郎（1986）:『助動詞』新英文法選書 第4巻　大修館書店。
2. 金子　享（1995）:『言語の時間表現』 ひつじ書房。
3. 金田一春彦（1950）:「国語動詞の一分類」金田一編『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房（1976），pp.5−26。
4. ＿＿＿＿（1955）:「日本語動詞のテンスとアスペクト」金田一編『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房（1976），pp.27−61。
5. 小泉・船城・本田・仁田・塚本編（1989）:『日本語基本動詞用法辞典』 大修館書店。
6. 鈴木重幸（1972）:『日本語文法・形態論』 むぎ書房。
7. ＿＿＿＿（1976）:「日本語動詞のすがた（アスペクト）について――～スルの形と～シテイルの形」金田一編『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房（1976），pp.63−81。
8. 高橋太郎（1976）:「すがたともくろみ」金田一編『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房（1976），pp.117−153。
9. 寺村秀夫（1984）:『日本語のシンタクスと意味 Ⅱ』 くろしお出版。
10. 藤井　正（1976）:「‘動詞＋ている’の意味」金田一編『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房（1976），pp.97−116。
11. 吉川武時（1976）:「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一編『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房（1976），pp.155−327。

12. Allwood, Andersson, and Dahl (1977): *Logic in Linguistics,* Cambridge University Press.
13. Comrie, Bernard (1976): *Aspect,* Cambridge University Press.
14. _____(1985) : *Tense,* Cambridge University Press.
15. Dahl, Östen (1981): "On thhe Definition of the Telic-Atelic (Bounded-Nonbounded) Distinction," Tedeschi, P. and A. Zaenen (eds.) *Syntax and Semantics* 14, Academic Press, pp.79–90.
16. Frawley, William (1992): *Linguistic Semantics,* Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
17. Hornstein, Norbert (1990): *As Time Goes By: Tense and Universal Grammar,* MIT Press.
18. Leech, Geoffrey (1987): *Meaning and the English Verb* 2nd Edition, Longman.
19. Mourelatos, Alexander P. D. (1981): "Events, Processes, and States," Tedeschi, P. and A. Zaenen (eds.) *Syntax and Semantics* 14, Academic Press, pp.191–212.
20. Reichenbach, Hans (1947): *Elements of Symbolic Logic,* Macmillan.
21. Smith, Carlota S. (1981): "Semantic and Syntactic Constraints on Temporal Interpretation," Tedeschi, P. and A. Zaenen (eds.) *Syntax and Semantics* 14, Academic Press, pp.213–237.
22. _____(1992): *The Parameter of Aspect,* Kluwer Academic Publishers.
23. Vlach, Frank (1981): "The Semantics of the Progressive," Tedeschi, P. and A. Zaenen (eds.) *Syntax and Semantics* 14, Academic Press, pp.271–292.